中国湖南省新晃県トン族民家の火鉢屋と骨組との関係について

ON THE RELATIONSHIP BETWEEN THE FIREPLACE AND THE FRAME OF THE RURAL HOUSES OF DONG PEOPLE IN XINGHUANG COUNTY OF HUNAN PROVINCE OF CHINA

柳 肅*, 土田 充義**, 晴 永知之***

Su LIU, Mitsuyoshi TSUCHIDA and Tomoyuki HARUNAGA

Dong people in Xinghuang county of Hunan province of China is the branch of Dong people in Hunan province. The life style is different from other peoples and Dong people in other place. The most famous feature is that Dong People in Xinghuang county live in the fireplace on the upper floor. There is certainly one fireplace for one family. Dong people in Xinghuang county have the habit that a few fraternal families live in one house. In this case there were a few fireplace in the same house. The frame of the rural houses was changed in order to arrange a few rooms with the fireplace. We made research on the fireplace, it's scale, it's position and the development of it's frame.

*Keywords: Dong people in Xinghuang county, rural houses, fireplace, frame
plane, development*

新晃県のトン族, 民家, 火鉢, 骨組, 平面, 発展

1. はじめに

トン族^(注1)は中国の湖南、貴州、広西の三省の山岳地区に住んでいる。湖南省西部の新晃県のトン族は湖南省トン族の一部である。湖南省内トン族住居区の北側に住んでいるので、“北トン”と言う。通道県に住むトン族は“南トン”という^(注2)。通道県のトン族民家は調べられているが、新晃県のトン族民家はまだ調査されていなかった^(注3)。私達は新晃県内で保存状態がよく、集落全体を実測することができる規模を選んだ。それは新晃トン族自治県人民政府の役人による候補地から選択した。この地は北西を前面とした小高い丘で、等高線上に住居が並び前面に川が流れていた(図1、2)。そこは新晃トン族自治県中寨鎮大寨村と称し、民家24棟が並び、秩序よく配置されていた。この村以外の民家6棟も実測して、調査した民家は合計30棟である。新晃県トン族民家は必ず“火鉢”を設けている。これは湖南省の他の少数民族民家でも通道県のトン族民家でも設けられていない。“火鉢”と言うのは部屋の中の一部^(注4)に接して地面から約50センチの高さに高床を造り、その上に囲炉裏が造られ、下部は囲炉裏を支える骨組で、高床の形式だが、然し部屋の一部にだけ作っている。二方向は壁に寄せ、他の二方は壁から離れている。火鉢下は道具や、燃料のための柴を置いている(写真1、図3)^(注5)。調査時では、その火鉢の役割は冬季に採暖と炊事に使い、食事もこ

こです。夏季には台所で料理をつくった後、火鉢の上で食事する。この場合低い椅子に腰掛けて食事し、採暖の時も同様である。火鉢で家族全員が食事し、集まるところである。火鉢は家族の中心で、必ず一家族に一つの火鉢がある。新晃県のトン族は結婚した兄弟家族が数世帯で一棟家屋の中で同居する習慣がある。その場合はその家屋内に世帯数と同じ数だけ火鉢がある。その上必ず一火鉢が一部屋を占める。その部屋は“火鉢屋”と称す。これは新晃県のトン族民家の一番重要な特徴と考えられる。

以上の通り、トン族民家にとって重要な火鉢について述べた。まずこの火鉢の位置と規模について述べ、次に火鉢屋をいかに広く確保し、時には連続されるために骨組に変化が生じたことを明らかにする。この変化を骨組の発展と捉えその過程を考察した。

2. 火鉢屋の位置と規模

トン族民家の平面形式は中央に堂屋を置き、堂屋の両側が寝室と倉庫で、後部に火鉢屋や台所がある(図4)。24棟の民家の火鉢の位置を調べると堂屋の後方に設けることがよく分かる。後方に設けることができない民家7棟(図5-1の5、14、15、19、20、21、22番)は背後に山があるため、狭い敷地に建てられている。そのため奥行きが深くできない。その結果、側面後方に火鉢を置くことになった。また、狭い敷地にもかかわらず、堂屋の後方に火鉢を設ける時

* 鹿児島大学工学部 博士後期課程・工修

** 鹿児島大学工学部 教授・工博

*** 鹿児島大学工学部 助手・工修

Doctor Course of Graduate School, Kagoshima University, M. Eng.
Prof., Department of Architecture, Faculty of Engineering, Kagoshima University,
Dr. Eng.
Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kagoshima
University, M. Eng.

図1、新潟県中寨鎮大寨村

図2、大寨村の断面

写真1、新潟県のトン族民家の火舗

図3、火舗の構造

図4、新潟県トン族民家の平面形式（梁系周氏住宅）

には、堂屋の入口を少し後方（この部分を呑口と称す）にすべき方針がくずれて、堂屋が前方に出て、側面と一致させる（図5-Iの12、13、24番）^{注5)}。時には火舗屋を後方に突出させて、スペースを確保している（図5-Iの24番）。これら一連の火舗屋に対する設計方針は異常なまでに堂屋を後方に設ける意図がはたらいていたと指摘できるであろう。何故堂屋の後方に火舗屋を設けるかの質問には明確に答えられないが、火舗は単に食事をつくるだけでなく、家族全員のあつまる中心的な場であり、堂屋との類似性があり、堂屋に次ぐ部屋として中央に設ける必要があったのかもしれない。かまどを屋内に設けている場合もあるが（図4）、そのかまどは後舗のもので、多くのかまどは仮設的な所に設けられていた。したがって、一年を通じて火舗を使用していたであろう。

火舗に座するにはルールがある。年上の人あるいは主人は開が裏の奥に座る。客がいた時は客がそこに座り、主人は開が裏の横に、家族と共に座る。主婦は開が裏の手前に座る（図6）。それ

に応じて火舗の寸法にもルールがある（図6、表1参照）。主人の座（幅g）は主婦の座（幅c）より、必ず広く、家族の座（幅h）が最も広い、それはほぼ正方形の敷敷に開が裏を上間側に寄せて、更に主婦の座の方に寄せているからである。長さ（図6と表1の中のaとb）をそれぞれ平均すると長さは2.38メートル、幅は2.29メートルである。長さ（a）は幅（b）より少し大きいものの、またその逆もあり、正方形を基本としていたことが分かる。開が裏の長さ（e）と幅（f）の差は施工上の差といえる程で、設計上は正方形であろう（表1）。家族の座（h）は火舗屋の広さによるために違いが大きい。それから見ると火舗は正方形に近いけれども、大切なことは奥行方向の長さ（a）を確保して、その奥行方向の長さに合わせて横方向の幅を決めたのであろう。他に、火舗以外の上間は料理をつくる場所あるいは通路として、一定の広さが必要である。したがって火舗だけでなく上間部分が火舗屋には大切で必ずあった。火舗屋の間口、奥行には差がある（表2）。しかし、敷地の制約を受けた場合（図5-

図5、大森村の24棟トン族民家の平面（簡略図）

図6、火鉢の上の座席位置と寸法（表1参照）

I) でも火鉢屋にまで制約を受けることはほとんどない。ただ楊玉珍氏住宅（21番）の火鉢の開口が最も小さい。これは敷地の制約かもしれない。これ以外には火鉢の開口においても奥行においても制約を受けているとは言えない。火鉢屋の開口のうち横に並べた場合（B型平面）は小さく、逆に奥行は大きい。このことだけをまず指摘しておこう。

3、火鉢屋から見た骨組

新晃県のトン族民家の火鉢屋を後部に設けることの重要性を指摘した。その骨組は必ず棟持柱があり、柱間に貫を通し、貫の上に束を立てて、柱上と同様に母屋を置き、その上に垂木を掛け、野地板がなく、そのまま瓦を重ねる。前後に下屋を設け、切妻造の屋根である。後方の段差の透間から煙が出る。その下方に火鉢屋がある。その火鉢屋を堂屋の後方に一列に横方向に並べることが行われた^{注6)}。それは後部屋を分割する方法が違うので、区別するために“A型平面”と“B型平面”の二種類に分けた。つまり堂屋と後部の部屋は柱筋が通り、堂屋の両側の壁は後方の壁まで通る。これを“A型平面”とする（図5-I、II）。その際敷地の制約を受けるA型平面（図5-I）と制約を受けないA型平面（図5-II）に分けてみた。それは火鉢屋を後方横に設ける場合と区別したいからである。次に、多くの火鉢屋を必要として、後部を最大四部屋に分ける。これを“B型平面”とする（図5-III）。この場合堂屋の両側の壁と後部の壁は対応しない、後部の壁は自由に設けられる。一世帯が住む家屋

はA型平面を基本とし、多世帯で同居する家屋は後部の火鉢屋を分割できるB型平面を基本とする。調査時には大森村の24棟の民家の中で兄弟家族が同居する民家が7棟あった。B型平面の家屋に住むのは4棟で（表2と図5の4、6、9、11番）、1棟は地形に制約されて奥行が浅かった（表2と図5の22番）。他の2棟（表2と図5の7、10番）はA型平面の家屋を改造した。一世帯でもB型平面に住むのが1棟あった（表2と図5の16番）。子供の数や経済的理由で同居する場合もあるので、流動的な人間と固定的な住居では必ずしも対応しない。それは当然であろう。然しB型平面は数世帯同居つまり、火鉢屋を並べることを考慮して成立したことは確かだろう。

トン族民家の骨組は中国南方民家に用いられる“穿斗式”（柱に貫を通しその上に束を立てる）架構形式で、常に縦方向に四つ架構

表1、新晃トン族民家（大森村）火鉢寸法

番号	住宅名	a	b	c	d	e	f	g	h	高さ
1	梁系源住宅	魔屋のため火鉢がなかった								
2	梁系純住宅	2389	2390	541	160	891	899	957	1331	505
3	梁系漢住宅	2620			210	900	900			460
4	蒲解有兄弟3人住宅	2389	1916	659	210	831	839	899	867	468
		2364	2202	627	210	890	895	847	1097	497
5	梁普運住宅	2400	2372	552	195	910	900	938	1277	
6	梁系維兄弟2人住宅	2212	2170	568	205	770	755	874	1210	
7	梁源祥兄弟2人住宅	2280	2360	680	190	830	840	770	1330	550
8	梁系岡住宅	2240	2372	512	195	876	875	852	1302	
9	梁系兄弟4人住宅	2376	2303	568	181	889	887	919	1235	
10	呉必清兄弟3人住宅	2460	2460	560	192	905	900	995	1368	
11	曾紀梅兄弟2人住宅	魔屋のため火鉢がなかった								
12	曾紀正住宅	2280	2120		165	763	760		1095	545
13	梁系柱住宅	2440	2250	550	235	865	860	1025	1155	
14	曾仁礼住宅	2438	2368		105	817	827	1516		
15	梁系神住宅	2507	2645	731	187	902	910	874	1548	
16	梁系解住宅									484
17	梁源泉住宅	2394	2342	643	125	840	849	911	1368	
18	梁系皇住宅	2403	2338	616	229	771	841	1016	1268	518
19	梁系鳳住宅	2310	2060		150	845	860		1050	
20	梁源東住宅	2430			210	883	890			
21	楊玉珍住宅	2143	2020	417	145					
22	呉必軍兄弟2人住宅	2150	2045	493	187	797	810	860	1048	
23	梁源源住宅	2705	2627	775	180	872		1058		
24	梁源明住宅	2385	2378	560	160	900	900	920	1318	
	平均	2378	2287	586	183	855	860	955	1228	503

表2、大寨村の24棟民家に関する数値

順番	住宅名	年代	平面 形式	構造 形式	間口 寸法	奥行 寸法	奥行と間 口の比	タイプ				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	堂屋の間口	火鉢屋の間口	火鉢屋奥行	備考
								1	2	3	4							
1	梁系源住宅	150年前	A型	A型	10930	8702	0.8		○				△		3880	堂屋の間口と同じ	4122	廐屋
2	梁系純住宅	100年前	A型	A型	9266	8513	0.92		○				△		3638	同上	3819	
3	梁系漢住宅	1931年	A型	B型	10520	10176	0.97			○			△		4210	同上	3525	
4	蒲昭有兄弟3人住宅	1950年代	B型	B型	11605	10236	0.88				○		△		4126	2899~3035	4083	
5	梁普運住宅	1951年	A型	A型	10914	7736	0.71		○			△			4025	3447	4340	後部の部屋が狭い
6	梁系雄兄弟2人住宅	1954年	B型	B型	11820	10587	0.9				○		△		4135	3210~3379	4175	
7	梁源祥兄弟2人住宅	1960年	A型	A型	10530	10190	0.97	○					△		3740	堂屋の間口と同じ	3320	部屋の中に柱がある
8	梁系周住宅	1960年	A型	B型	10409	8958	0.86			○			△		3686	同上	3683	
9	梁系兄弟1人住宅	1961年	B型	B型	12380	10670	0.86				○		△		4340	2440~3750	4430	
10	呉必情兄弟3人住宅	1962年	A型	A型	11668	11681	1.01	○					△		4112	堂屋の間口と同じ	4670	部屋の中に柱がある
11	曾紀恂兄弟2人住宅	1962年	B型	B型	12269	10771	0.88				○		△		4190	4096~4211	4707	廐屋
12	曾紀正住宅	1965年	A型	A型	10018	8406	0.84	○				△			3406	堂屋の間口と同じ	3325	
13	梁系柱住宅	1968年	A型	A型	8960	8750	0.98		○			△			3450	同上	3870	
14	曾仁礼住宅	1978年	A型	A型	10646	8177	0.77	○				△			3852	3361	3278	後部の部屋が狭い
15	梁系沛住宅	1982年	A型	A型	11827	11874	1		○			△			4401	3734	3549	後部の部屋が狭い
16	梁系解住宅	1983年	B型	B型	11842	10668	0.9			○			△		3980	3910	3569	
17	梁源泉住宅	1983年	A型	A型	11497	12486	1.09		○				△		4078	堂屋の間口と同じ	4551	部屋の中に柱がある
18	梁系皇住宅	1983年	A型	A型	10327	10431	1.01	○					△		3609	同上	4051	
19	梁系鳳住宅	1983年	A型	A型	11090	7495	0.68		○			△			3750	3680	4082	後部の部屋が狭い
20	梁源東住宅	1983年	A型	A型	11778	7559	0.64	○				△			4068	3342	3472	後部の部屋が狭い
21	楊玉珍住宅	1983年	A型	A型	10388	6822	0.66	○				△			3863	3149	3418	後部の部屋が狭い
22	呉必軍兄弟2人住宅	1987年	A型	A型	11463	8118	0.71		○			△			4053	3355~4055	4048	後部の部屋が狭い
23	梁源源住宅	1988年	A型	A型	12396	11282	0.91	○					△		4368	堂屋の間口と同じ	4932	
24	梁源明住宅	1990年	A型	A型	11555	8333	0.72	○				△			4130	同上	3773	

を立てて横材でつないでいる（図7）。間口は3開間に分けられる。一世帯で一棟家屋に住むと、後部の部屋は前部と同じ3開間に分けられ（A型平面）、これを“A型架構”とする（図8のa）。“穿斗式”架構は柱と柱の間のスハシが太くない。そこで、架構は柱間に一本束を使い、時には二本束を使って、スハシを少し拡大する。然しそのスハシが火鉢屋の奥行には足りない。そこで火鉢屋の中に柱を設けないために、一本あるいは二本の柱を抜く、これを“B型架構”とする（図8のb）。A型平面がA型架構を採用し、B型平面がB型架構を採用する（図9）。

それらの架構を4つに分類して、柱を抜く過程をたどってみる。それらの種類の決定的な要素は柱間のスハシである。架構で2本の柱間

図7、トン族民家の骨組

図8、トン族民家の二種構造形式

図9、架構と平面との集まる

に1本束を使い、柱と束の間の寸法は60センチから100センチの間で、それで柱間のスハシは2メートルを越えない。柱間のスハシを拡大させる時2本束を使うことで、スハシが2メートルを越えることができる、然し3メートルをこえない。3メートルを越えた時は3本束を使い、実際には1本柱を抜くことになる。トン族民家の中で柱と柱の間にスハシが一番大きいときは4メートル数十センチにもなって、5本束を使って、実際には2本柱を抜く（図10）。そこでタイプ1は柱間がほぼ等しくて、スハシは2メートルを越えない。タイプ2は柱間のスハシを拡大し、2本束を使い（灰色に塗っている箇所）、2メートルを越えて、3メートルを越えない。タイプ3は1本柱を抜いて（黒色に塗っている箇所）、3メートルを越えて、4メートルを越えない。タイプ4は2本柱を抜いて、4メートルを越えた。タイプ1とタイプ2はA型架構で、全てA型平面を採用している。タイプ3とタイプ4はB型架構である。然しタイプ3（柱1本を抜く）の3棟の中で2棟はA型平面で（図10と図5の3、8番）、1棟はB型平面（図10と図5の16番）である。タイプ4（柱2本を抜く）は全てB型平面である。タイプ3は完成のB型平面への変化の過程の骨組形式と位置づけうる。つまり、2棟は伝統的なA型平面を踏襲しながら、柱1本を抜いた（タイプ3）。一方1棟は柱1本を抜いただけで、B型平面を採用した。これはどのように考えたらよいであろうか。トン族民家の特徴として自由壁（柱間の壁とは異なり、柱がなくとも間仕切とする壁）を他の少数民族民家（土家族民家、苗族民家、瑶族民家）よりも多く設けていた^{注7)}。したがって、火鉢屋の数に応じて対応できる方法に未完成であるが用いた。つまりA型平面としているのは火鉢屋が1箇所であった。一方B型平面にしたのは火鉢屋を2箇所以上にしたかったから、柱1本抜くことで、未完成ながら火鉢屋の数に応じ

表3. 6棟の間口寸法と火鉢屋奥行

タイプ	番号	間口寸法	火鉢屋奥行	火鉢屋奥行 間口
1	7	10530	3320	0.315
	12	10018	3325	0.33
	24	11555	3569	0.326
3	3	10520	3525	0.335
	8	10409	3683	0.354
	16	11842	3773	0.319

表4. 7棟の間口寸法と火鉢屋奥行

タイプ	番号	間口寸法	火鉢屋奥行	火鉢屋奥行 間口
1	10	11668	4670	0.4
	18	10327	4051	0.392
	23	12396	4932	0.398
4	4	11605	4083	0.352
	6	11820	4475	0.379
	9	12380	4430	0.358
	11	12269	4707	0.384

注: ←→ 堂屋の位置、 ←→ 火鉢屋の位置

図10. トン族民家の構造のタイプ

て壁を自由に設けることができたからであると言えるであろう。タイプ4は完成のB型平面の骨組である。

タイプ2 (スパンを少し広くし、2本束を使用) の場合、束2本を使う位置は架構の後部や中や前部にある。したがって、スパンを広くするために束を2本立てる方法は火鉢だけではなく、各所に設ける方法である (図10、灰色に塗っている箇所)。タイプ3の場合、柱を抜く位置は全て火鉢屋である (図10、タイプ3)。タイプ4の場合、柱を抜く位置はただ火鉢屋にあるだけでなく、棟持柱の前方2スパン、後方1スパンとなり、火鉢屋の位置がきちんとしていた (図10、タイプ4)。これらのことから柱を減らす目的は火鉢屋の中に柱を立てないため、広いスパンの火鉢屋を確保するだけでなく、スパンを拡大すればするほど架構は画一化されることを示している。

以上のことから、骨組の中で柱を抜かれてスパンを拡大するところはいつも後部で、火鉢屋の分割を意図していたことが分かる。これはA型架構から火鉢屋を並べるためにB型架構が成立したといえる。A型架構はA型架構で火鉢屋の面積を拡張していた。そのために火鉢屋の間口が最も広く奥行が最も大きい火鉢屋 (23番) はA型架構であった。A型架構が火鉢屋を並べるために、全てB型架構へ移行せずに、火鉢屋をいくつも設けらる配慮をしながら、A型架構にも火鉢屋の拡張を行っていたのである。ここで指摘したいことは火鉢屋を並べるためにA型架構からB型架構が成立したということである。

4. 骨組の発展について

火鉢屋を棟方向に並べることを主眼としたB型架構 (タイプ3、タ

イプ4) はA型架構 (タイプ2) から成立したことを明らかにした。ここでは骨組を4種類に分類 (タイプ1、タイプ2、タイプ3、タイプ4) した各タイプが年代と共にどのような変化をするかをたどることにする。

まずタイプ1は比較的新しい。民家群が建ち、残った敷地に、つまり奥行の狭い敷地に建つ民家に多く使われる (表2)。柱間に束1本を立てて規則的に並べる骨組が古い形式のように思われるが、調査範囲では柱間に束2本を立て、柱間を少し広くする骨組 (タイプ2) が古い形式であった。その少し広い柱間は火鉢屋だけでなく、他の箇所にも使われていた (図10、タイプ2の灰色に塗った部分)。時には火鉢屋に使われないこともあるので、柱間に束2本立てる骨組は直接火鉢屋と結びつかず、古くから存在していて、それを火鉢屋に使ったということになる。柱間に束2本立てた間隔では狭すぎて、火鉢屋を設けることができず、柱1本抜くタイプ3へ移行し、更に柱2本抜くタイプ4へ移行したといえる (図10、表2)。全て移行することではなく、敷地の制約をうけない場所にタイプ1 (18、23番)、タイプ2 (17番) は建てられているので、むしろタイプ4の方が建てられなくなったと言えよう。次にタイプ3についてA型平面とB型平面から考察してみたい。このことは先に述べたが、年代を考慮に入れると柱1本抜かれて、火鉢屋を確保しても伝統的なA型平面を踏襲し、タイプ4が成立した後に、つまりB型平面が成立した後に、B型平面をタイプ3にも採用することになったとも考えられる。これは少数ないけれども年代的に並べてみるといえるということだけのことである。実際には火鉢屋が必要であれば両端に作ることも (7番、22番) 後方に並べる (10番) こともした。骨組にとらわれずに柱を立てたまま、火鉢屋を設け (17番) たりもした。これらのことがより容易にできるために柱1本抜くことになったのであろう。これを骨組の発展として捉えたいのである。更に柱2本抜いて、火鉢屋を並べることに発展した。

5. 民家の間口と火鉢屋の奥行

火鉢屋の奥行寸法が大きい場合は民家の間口は広い (表2)。タイプ4の場合は火鉢屋を並べるわけであるから、間口を広くすることが必要であろう。そこで、両者には関係がありそうだが、寸法値から各タイプをまとめると明確な数値を導き出すことができない。ここでは柱1本抜くタイプ3と2本抜くタイプ4それに柱はあるがタイプ

3とタイプ4に類似する火舗屋を設けている骨組をタイプ1から選び、それらを比較することから間口と火舗屋の奥行を検討してみる。

まず柱1本抜くタイプ3（図10の3、8、16番）と柱はあるがタイプ3と同じ状態で火舗屋を設けているタイプ1（図10の7、12、24番）を取り上げて考えてみる。タイプ2の13番民家はこれに類似するが、この1棟だけは敷地の関係で間口2間であるために除く。それではタイプ3の3棟とタイプ1の3棟が類似して、言えることは火舗屋の奥行が小さいことである（表3）。それは柱1本抜いただけの長さを火舗屋奥行としているから当然であろう。このタイプ1とタイプ3を比較するとタイプ1の方が火舗屋奥行が間口に占める割合を見ると少し小さい。このことは間口寸法があまり変化していないと見るとタイプ1の方が少し狭く、タイプ3の方が火舗屋奥行を広くしていることが分かる。タイプ3の16番民家が間口寸法を非常に広くした理由は堂屋後部に火舗屋を並べる意図があったからであろう。

次に柱2本抜くタイプ4（図10の4、6、9、11番）と柱はあるがタイプ4と同じ状態で火舗屋を設けているタイプ1（図10の10、18、23番）を比較するとタイプ1の方は火舗屋奥行が間口寸法に占める割合を見ると大きい（表4）。間口寸法にはそれ程差がないので、タイプ1の方が火舗屋奥行を少し広くしていると言える。つまり柱2本抜いて、火舗屋を並べることはできるにしても、柱を立てた場合よりも火舗屋奥行を大きくすることはできないことを示している。柱1本抜く場合はまだ火舗屋奥行を広くできても、2本抜くとタイプ1（10、18、23番）程に広くできないことはそこに限界があるのだろう。それ故タイプ4はある時期だけに存在し、新しくなると採用されなくなるのかもしれない。間口を広くし、火舗屋の奥行を大きくするのはタイプ1の骨組の方で、この工法は伝統的なタイプ2（1、2番）とは異なり、比較的新しい骨組で、柱間を広くするには有効な方法であった。

全体的にいえることは新しくなるに従って、骨組（タイプ1）は同一でも、火舗屋奥行を大きくし、間口を広くする傾向にあった。このことからタイプ4だけが火舗屋の拡張を進めていたということではなく、たいぶ1も同様に進めていたことを読みとることができる。

6、結論

湖南省新晃県のトン族は特殊な火舗の生活様式があるので、その火舗屋をいくつも確保するために骨組に発展があったし、平面の拡張があった。それは多世帯の住居習慣の出現のために平面形式に変化があったと言えるだろう。その平面形式に対応させて骨組を発展させた。年代によって、その発展の過程をたどることができた。それらの発展の結果、他の少数民族民家とは異なる正方形に近い平面形式になったのであろう。

謝辞：本研究は鹿児島大学工学部建築学科建築歴史研究室と中国湖南大学建築系の共同研究の成果の一部をまとめた。この調査には多くの方々の協力を得て実施された。実測では湖南大学が断面の方を担当し、鹿児島大学では平面の方を受け持った。地元の方々、政府の役人の方々にお世話になった。記して感謝の意を表する。当研究は科学研究費補助金（国際学術研究）平成8年度、平成9年度『湖南省民家の研究』課題番号08044162（代表土田充義）と同平成10年度、11年度課題番号09045072（代表土田充義）による。

注：

- 1) 侗族と称す、日本語にないためにトン族と記す。中国の少数民族の一つで、湖南、貴州、広西の三省に分布する。人口251,4014（1990年中国第四次人口普查より）で、湖南省のトン族人口は7,49026である。トン族は中国南方少数民族の『百越』系統に属し、自分の言語を持って、漢・チベット語系、チワン・トン語族に属す（高文徳主編、吉林教育出版社1995年出版の『中国少数民族大辞典』と馬寅主編、君島久子監訳、三省堂1987年出版の『概説中国の少数民族』参照）。
- 2) “北トン”と“南トン”の名は地元の名称で、当地人民政府民族委員会の人や地元トン族の人達が用いていた。
- 3) 今まで湖南省の少数民族の民家研究の書物は『湖南伝統建築』（楊慎初主編、湖南教育出版社1993年8月出版）と『中国民族建築（湖南分巻）』（王紹周主編、江蘇科學技術出版社1998年出版）だけである。然しそこでは通道県のトン族民家だけをとりあつかい、新晃県のトン族民家は今まで研究の対象になっていない。湖南省以外では貴州省と広西省のトン族民家について本と論文が多くある。日本側にも貴州省のトン族民家について論文がある。
- 4) 柳康、土田充義など：『湖南省新晃県トン族民家における開炉裏の使い方から見た生活様式について』日本建築学会研究報告（九州支部）第38号（計画系）P473に開炉裏の使い方を述べている。この新晃県に接する貴州省三江県のトン族民居には、高床部を巾の狭い板で構成した足入式のものがあり、中央の鉄鍋に炭を燃料とする（日中建業NO28、26&29頁、生活文化史NO17、30&36頁）。
- 5) 『新晃県志』（三聯書店1993年出版）と調査した時のヒヤリングによる、トン族民家は呑口があり、これは“開口屋”と称し、それは財を招き入れるという信仰がある。そのために堂屋の入口に呑口がないのを“平口屋”と称し、造ることを避けた。
- 6) 土田充義、晴永知之、米森義辰、柳康：『中国湖南省トン族民家の研究』（平成11年9月鹿児島大学工学部研究報告 第41号）を参照。
- 7) 米森義辰：『湖南省新晃県トン族住居の設計手法と自由壁に関する研究』日本建築学会研究報告（九州支部）第39号（計画系）P477

（2000年5月8日原稿受理、2000年9月12日採用決定）